父の戦死が告げられた日 私たちは 戦争遺児になりました

幼い頃、戦地へと出征した父。「無事に帰って来てほしい」そんな家族の願いもむなしく…。突きつけられた「戦死」という現実。

父を亡くし、戦争遺児となった武田清行さんと毛利知子さん。現在、鬼北町遺族会に所属している2人に話を聞きました。

―父親が出征したのはいつですか。

武田　私の父である武田賢は、昭和19年2月に出征しました。そのときが、父にとって3回目の出征でした。家族や親せきは35歳という父親の年齢を考えても、もう召集されることはないだろうと思っていたので、大変驚いたことを覚えています。それだけ兵士が足りなくなっていたのでしょうね。

毛利　私の父・毛利定行は、昭和18年に出征しました。満州で数年過ごした後、ビルマへ移動したそうです。

中には17・18歳で出征した人もいたそうです。私の叔父も召集されたときはまだ19歳でした。

1

―父親との思い出は残っていますか。

毛利　私は父が出征したときは3歳と幼かったので、正直、父との思い出は残っていないですね。家に写真が残っているだけです。

武田　私もはっきりとした表情などは思い出せません。なんとなく家の中に父親がいた「影」を思い出すぐらいです。

しかし戦地の父からはたくさんのハガキが、軍事郵便として届きました。1週間に1通ぐらいのペースで届いていたと思います。苦労していた母を気遣う内容や、私と姉には「勉強やお手伝いをするように」などといった内容が書かれていましたね。今でもそのハガキ全てを大切に保管しています。

―父親の戦死を知らされたのは…。

毛利　町誌では、父は20年の6月12日に亡くなったとなっています。これは国が父の足取りを辿り、推定した日時なのだろうと思います。遺骨は見つかっていませんから…。

しかし、あるとき知人から「私の父のことが載っている」と1冊の雑誌が届きました。それには、父とともに行動していた方が、父の最期について語っていました。それによると、父は亡くなったとされていた日よりも後に亡くなっていたことが分かりました。

どこで、どのようにして亡くなったのか、戦争に行った多くの人が、今も分からないままです。遺骨もほとんどの人が戻って来ていないと聞いています。

武田　私の父の場合は、終戦から4年後の昭和24年に戦死の公報が来ました。終戦時、父の消息は不明でした。なので、戦死扱いにはならず、それまでは留守家族としての扱いでした。

ある日、町から「最後に来た手紙を出すように」と通知がありました。最後に届いた手紙は私宛のもので、母がそのハガキを提出すると、上半分を切り取られて没収、その後しばらくして、ついに戦死を告げられました。死亡日は、昭和19年8月31日、そのハガキの消印から間もなくの日付でした。

毛利知子さん　もうりともこ
1940年生まれ。鬼北町遺族会会員。昭和20年、父・定行さんが戦死。終戦後間もなく弟・妹・叔父を病気で亡くす。吉波在住・74歳

終戦時からずっと不明でしたので、死亡日を推定する根拠としてそのハガキは使われたのだと思います。

―遺骨もなく、紙での通知だけで疑う気持ちはなかったのですか。

武田　便りも途絶えていますし、それを信じるしかないですからね。他には何も手がかりがないのですから。もちろん信じがたい気持ちはありますが…。

毛利　届けられた遺骨が入っているはずの桐箱の中には、木片が入っていた方や、中にはりんごが入っていた方もいらっしゃるそうです。遺骨が見つかっていない家族への担当者の配慮だったのかもしれませんね。